様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2014
課題番号：２２５２０８０８

研究課題名（和文）カナダにおける日系ガーディナーの歴史的展開と他民族との関係性をめぐる研究

研究課題名（英文）Historical development of a gardener of Japanese descent and study concerning relationship with an other race in Canada

研究代表者
河原　典史（KAWAHARA, Norifumi）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：６０２７８４８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、カナダのブリティッシュコロンビア州における日系（日本人）ガーディナー（庭園・造園業）の歴史的展開を４期にわけ、民族産業としての成立とその再編について考察した。
第1期は1900年代初頭にあたり、日本庭園の模索期になる。1920年代から太平洋戦争開戦にあたる第２期では、排斥によって漁業・製材業界などから締め出された日本人のなかには、庭園業で活躍する人々も少なくなかった。1947年から1960年代初頭にあたる第３期では、戦前からの経営者のもと、二世・帰加二世が雇用者として活躍した。1970年代になり、戦後の移住者を迎える第４期では、造園業の技術が日本・アメリカから導入されるうようになった。

研究成果の概要（英文）：This research is considered historical development of a Japanese gardener in the Canadian British Columbia state which splits up into 4 periods. And it's considered about reorganization of formed garden trade and landscape gardening as Japanese business style. The 1st stage is a grope period of a Japanese garden in case of the beginning in 1900’s. The 2nd stage is cross with the Pacific War from 1920 's. Japanese received a boycott in this time, and it was shut out of fishing and lumbering. Therefore many Japanese worked an active part by a gardener. The 3rd stage is bruised in the beginning in 1960’s from 1947. In this time, the second generation born in Canada which has been gone back from Japan “kikanisei” helped an active part as a gardener under the boss who is because he played an active part as a gardener, before the war. The 4th stage is 1970’s. A new immigrant to Canada introduced technology of new landscape gardening from Japan and United States.

研究分野：歴史地理学

キーワード：カナダ　日系　ガーディナー　日本庭園　民族産業　移民

１．研究開始当初の背景

(1) カナダへ渡った日本人の就業には、特定の業種に集中する傾向があった。排斥のなか、英語のままならない日本人が就ける職業は限られていた。それは、渡航時期や日本とカナダの政策、そして先駆者の出現とその後の連鎖移住などによるところが大きい。第二次世界大戦以前では、漁業には和歌山県出身者が多く、製材業や商業には滋賀県、伐木業や鉱業では熊本県の出身者の占める割合が大きかった。しかし，ガーディナー（庭園・造園業）として従事する日本人の実態については、その数が多かったにも関わらず把握できなかった。

(2)第二次世界大戦後についても、日系２世や帰加２世などが、ガーディナーとなるケースが多いことは報告されてきた。しかし、先行研究では、製材業・漁業界を追われた彼らがガーディナーを選択した（せざるをえなかった）理由については、「器用で綺麗好き」という日本人（日系人）の特長ばかりが指摘され、日本・カナダ双方の社会・経済的背景については、全く追求されてこなかった。ましてや、戦前からの連続性のなかで、日本人が再びガーディナーを選択した要因にまで考察が及んでいないのである。

２．研究の目的

本研究では、①カナダ日系ガーディナー史における時期区分の検討、②各時期における最適な事例の実証研究、③庭園業から造園業への発展に関わる日本・カナダ・アメリカとの人的・技術的交流を解明する。具体的にはカナダ、特にブリティッシュ・コロンビア（以下、ＢＣ）州における日系（日本人）ガーディナー（Gardener:庭園・造園業者）の歴史的展開を 19 世紀初頭から４期にわけ、民族産業（エスニック・ビジネス）としての成立とその再編について考察する。当地への日本人の移住、アメリカ合衆国・ワシントン州との人的・技術的交流にともなう庭園・造園技術の移動と定着、中国・インド・ベトナム系などとの関係について明らかにする。つまり、本研究では、これまで看過されてきた日系ガーディナーについて、他民族との関わりのなかで民族産業（エスニック・ビジネス）として成立した過程を歴史地理学的アプローチから紐解き、新たなカナダ日本人移民史を構築することを目的とする。

３．研究の方法

(1) 戦前・戦後を通じて、*BC Directory* と *Fire Insurance Plan* を駆使することから、日系ガーディナーの居住パターンと都市構造、とくに住宅の郊外化との関わりを考察する。

(2)日本とカナダ、アメリカ各地におけるガーディナーに関する資料の分析を行なう。特に、日本では外務省外交資資料館や横浜開港記念資料館など、カナダではブリティッシュ・コロンビア大学、カナダ日系博物館、ＢＣアーカイブスやバンクーバー・アーガイブスなどの古文書館での資料を収集・分析する。

(3)上記の文献研究をふまえたキー・パーソンとなる人物へのインタビュー調査を実施する。カナダではバンクーバー日系ガーディナーズ協会をはじめ、ＢＣ州和歌山県人会やカナダ日系市民協会、日本では日系ガーディナーの出身地の図書館や博物館、さらには教育委員会などを通じて行なう。

４．研究成果

(1) 第 1 期は、ビクトリアとバンクーバーで日本庭園の造園が模索されていた時期である。

1843 年、ビクトリア郊外の Gorge 水路岸に、ハドソン湾会社はゴージ・パーク（Gorge Park）を開園した。1898 年（明治 31）に横浜市北方町（現在の横浜市中区）で生まれた岸田芳次郎と、広島県安芸郡仁保島村向灘（現在の広島市南区）出身の高田隼人は、この園内に資本金 5,000 ドルで 1.5 エーカー（約 6,070 ㎡）の土地を 10 年契約で借用した。1898 年にビクトリアへ渡航後、1903 年頃に再渡加した岸田は、1907 年にゴージ・パークに日本庭園を開園するため、1842 年（天保 13）に生まれた父・伊三郎を呼び寄せた。２月に着工、７月に完成した日本庭園には２棟の喫茶店、３ヶ所の小池には金魚や鯉が放され、築山をとりまく簾の迷路には石灯篭や長椅子とともに、盆栽が配された。ここは、当時アメリカ合衆国でブームであった展示施設としての日本庭園であった。

日本庭園が開園した翌 1908 年、ゴージ・パークにもう１ヶ所の日本建築物が完成した。広島県出身の西本善吉は、三段の太鼓橋と水上茶室（floating teahouse)、そして、40 フィート×10 フィートからなる 85 人乗りの屋形船（Japanese pleasure boat：YAKATA) を建築したのである。渡加当初は旅館業を営んでいた彼は、大工としてもビクトリアで活躍したようであるが、『加奈陀在留邦人々録(1926)』をみると、フレーザー川下流域のイーバンにあるテラノバ・キャナリーに居を移している。おそらく、当時に需要が高まった動力漁船の造船に携わったと思われる。

Red Pine（赤松）をはじめとする樹木や盆栽、灯篭や鶴を模った置物などは、日本から輸入されている。それを担ったのが、1891 年（明治 24）に横浜市唐沢（現在の横浜市南区）に創立した横浜植木株式会社である。当社は、さまざまな植物や盆栽、そして鉢や灯籠などの園芸用品を輸出する日本有数の植物商社である。横浜港を望む丘陵において、生家からわずか数 km しか離れていない同社の活躍を岸田親子は熟知していたからこそ、

日本庭園の造園に着手し、成功を収めたのであろう。また、乾季にあたる２月から 7 月のわずか半年間で、日本庭園を造園・開園できた労働力の確保については、当時、ビクトリアを根拠地にしていた日本人経営の海獣猟との関わりは看過できない。おもにオットセイを漁獲対象とするこの生業は、春から秋にかけて閑散期にあたり、余剰労働力が発生する。詳細については、今後も検討されねばならないが、日本庭園の造園にあたっては名もなき多くの日本人の協力があったようである。

ゴージ・パークの日本庭園の評判によって、伊三郎はビクトリアでいくつかの日本庭園を造園した。1908 年には BC 州副知事のバーナード邸（現在は取り壊し）、1909 年にはダンスミュアー邸のハトリー・パーク（現在のロイヤル・ロード大学内）、そして、1910 年には、すでに 1904 年に開園していたブッチャート・ガーデンに日本庭園が造園されたのである。ダンスミュアー家はバンクーバー島中部のカンバーランド炭鉱経営者、ブッチャート家は石灰岩採掘業者であることからわかるように、政治・実業家から次々に造園を依頼されるほど、伊三郎の日本庭園はビクトリアの人びとに愛されていたに違いない。

日本庭園を造園するため、カナダに呼び寄せられた伊三郎は、1912 年に帰国の途についた。彼の帰国後、これらの日本庭園の整備を任されたのは、広島県深安郡加茂村栗根（現在の広島県福山市）出身の野田忠一である。1878 年（明治 11）に生まれた野田の生業・渡航歴については、現在では不詳である。しかし、彼の先妻・テルが伊三郎との同郷である横浜市元町（現在の横浜市中区）出身という関係から、その夫・忠一が後任に選ばれたのであろう。野田とのその家族はハトリー・パークに小さな住宅を与えられ、伊三郎が残した日本庭園を守り続けた。

1920 年に芳次郎が帰国した後、1925 年 8 月 13 日にゴージ・パークは失火し、日本庭園も焼失した。翌年には、契約期間の満了を迎え、高田は公園の経営から撤退した。同時に、野田もブッチャート・ガーデンなどの整備を離任した。その後の野田は、ビクトリアのフォート街で整体師として活躍した。彼の出身地・栗根は幕末期から医学について向学心のある地域で、彼もその術を多少とも学んでいたのだろう。

なお、ホースシュ・ベイ（Horseshoe Bay）沖に浮かぶボゥエン島(Bowen Island)にも、わずかながら日本庭園があった事実に触れておきたい。1920 年代、ユニオン蒸気船株式会社による同島の観光開発のひとつとして、港湾を見下ろす丘陵に日本家屋型の喫茶室、河川沿いに遊歩道と太鼓橋が建設された。これを担ったのが、古賀大吉（佐賀県三養基郡北茂安村（現在の佐賀県三養基郡みやき町）出身）を中心とする日本人であった。彼らのなかには、鉱産資源開発への従事者としてこの島へ移り住んだ人もいた。このように、戦前の BC 州では現地のカナダ人の娯楽のひとつとして、日本庭園が一定以上の評価をうけていたのである。

ところで、バンクーバーにおいても日本庭園の造園計画があった。広島県安佐郡三川村古市（現在の広島市安佐南区）出身の角佐六は、1898 年にバンクーバーへ上陸した。漁業や山林伐採業へ従事して一時帰国した彼は、再入国後にバンクーバーで建設・石炭・保険業などを営む富豪のアーネスト・E・エヴァンス邸の花園監督者になった。興味深いのは、後に生物学者・社会主義者として名を馳せる山本宣治（以下、通称の山宣）が、一時この花園で働いていたことである。山宣の日記（『山本宣治全集 (第 6 巻：日記・書簡集)（1969)』からは、当時のバンクーバーにおける園芸の様子が垣間みられる。例えば、園丁長(ガーディナー責任者)の角以外のガーディナーは全員白人であったほか、ガラス温室ではバラやゼラニウムなどが栽培されていたことが記されている。山宣の渡加をめぐっては、カナダ日本人社会の重要人物が頻出する。1889（明治 22）年、京都市新京極のアクセサリーショップを営む山本亀松・多年夫妻の一人息子として生まれた山宣は、バンクーバーの眼科医であった親族の石原明之助（京都市西洞院高辻出身・京都府立医学校卒業）の誘いで 1907 年に渡加した。幼少期から園芸に親しみ、園芸見習として大隈重信邸への住み込みも経験していた山宣は、バンクーバーの有力新聞・*The Daily Province* の求人欄にガーディナー募集の広告を掲載した。やがて、石原の義兄であるバンクーバー日本人教会初代牧師・鏑木五郎（千葉県香取郡山倉村新里・現在の香取市）出身の紹介で、彼は先述したエヴァンス邸で角園丁長のもとで働くのである。そのころ、鏑木を中心とする日本人グループは、北バンクーバー21 番街に 1.5 エーカーの荒地を入手し、日本庭園の造園を画策していた。1908 年になると、彼らは 1 口・10 ドルで 3,000 株を募集し、資本金３万ドルの日本庭園会社の設立を計画した。社長に就任した鏑木は、山宣を同社の事務主任に命じたのである。つまり、ゴージ・パークに岸田伊三郎が造園した日本庭園の評判はバンクーバーの日本人社会にも知れ渡り、山宣は彼に設計を依頼しようとしていたようである。

日記や手紙からは、造園にあたっては宮城県出身の畠山なる人物に請負ってもらい、池や築山を造り、茶店や達磨落しを楽しむ遊戯場のほかに温室を一棟建て、そこでトマト、イチゴやカーネーションの促成栽培をする計画もあったことがわかる。そして、ボタンやシャクヤクなどの草花は前述した横浜植木株式会社から購入する予定も判明する。つまり、当時の北米で求められていた日本庭園

には一定のデザインがあり、それを伊三郎と横浜植木株式会社を通じて、山宣はバンクーバーにも実現しようとしたのである。ただし、実際にゴージ・パークの日本庭園を見学した山宣は、極めて懐疑的な感想を日記（1908年8月25日）に綴っている。

ところが、この日本庭園の造園はうまく進まなかった。社長の鏑木ほか、副社長の信夫千代治（宮城県登米郡石森村・現在の宮城県登米市出身）、会計の胎中楠右衛門（高知県安芸郡安芸町・現在の高知県安芸市出身）と堀田佐六（広島県安佐郡山本・現在の広島市安佐南区出身）が連名で日本語新聞『大陸日報』へ株主募集や資金納入、さらには株主総会の開催を呼びかけたが、それは順調ではなかった。また、整備されたゴージ・パークの一角での日本庭園の造園であった伊三郎と異なり、山宣は開墾から始めなければならなかった。さらに、ダイナマイトの使用や水道敷設の請求のため、市役所での手続きも必要であった。前年の1907年に起こったバンクーバー暴動をはじめ、当時のバンクーバーでは日本人に向けられた白人の視線は厳しかったに違いない。そのなかで、園芸経験があるとはいえ、20歳にも満たない山宣を事務主任に就かせ、設計から実際の造園、それ以前の開墾手続きまで任せるという日本庭園計画は無謀であったと言わざるをえない。

(2) 第２期には、多くの日本人移民が庭園業で活躍していた。

1931年のカナダ・センサスをみると、BC州における民族別の庭園・造園業（gardeners）、花卉農業(florist)と養樹農業(nurserymen)への従事者数がわかる。日本人では、女性3名を含む238名がこれらに就いていた。統計上、3種を細分した数値は不明であるが、そのほとんどはgardeners、つまり庭園業に従事していたのであろう。他民族では中国人が996名、ブリティッシュ系が620名、ドイツ・オーストリア人が80名である。そして、おもに中国人が日本人と同様の庭園業、他民族は造園業、または花卉農業と養樹農業に関わっていたと思われる。

『在米日本人史（1940）』にも、1938年におけるBC州のガーディナー数が判明する。そこには、「庭園業」としてバンクーバーに173名、フレーザー川流域に3名、バンクーバー島に２名の活躍がみられる。バンクーバーでの従事者数は、詳細な業種が不明である一般労働（585名）、商業（568名）、製材業（386名）、漁業（200名）に続く第４位を示す。また、1941年のカナダ・センサスによれば、BC州の就業構造について「その他の農業」に101人の日本人が就業していた。資料上、彼らはガーディナーと判断でき、同業に従事した全民族の約１割が日本人である。つまり、BC州、とくにバンクーバーにおいてガーディナーを生業する日本人は、想像以上に多かった。

1941年の“*BC Directory*“をみると、バンクーバーには144人のガーディナーが確認できる。彼らの出身地では鳥取県が26人（18.1%）と最も多く、そのすべてが弓ヶ浜半島を中心とする西伯郡からの移住であった。そして 滋賀県：25人（17.3%）、熊本県：11人（7.6%）に続いて、 山口県と岡山県が各８人（各 5.6%）、 高知県と福島県が７人（各 4.9%）である。製材業や商業への従事者の多い滋賀県、伐木業への熊本県など、カナダ移民の著名な輩出県よりも鳥取県が多くのカーディナーを生み出していることは興味深い。また、カナダ漁業界に多大な貢献をした和歌山県出身者は、ガーディナーにはわずか４名しか就いていない。

ガーディナーの居住地についても、特徴的である。彼らは日本人最大の居住区であるパウエル街や、日本人漁業者が集住したスティーブストンではなく、フレーザー・クリーク南岸のキツラノ地区やフェアビュー地区に居住することが多かった。それは、両地区に南接するショーネシー地区をはじめ、後背地には顧客となる上層のカナダ人宅が展開していたからである。バンクーバーの港湾地域にあたるパウエル街や、フレーザー川河口にキャナリーが連立するスティーブストン周辺は、多くの日系ガーディナーにとっては必ずしも良好な環境ではなかったのである。

1941年当時、キツラノ地区には100世帯の日本人が居を構えていた。『加奈陀在留邦人名簿（1926）』・『在加奈人人名録（1941）』と『加奈陀発展大鑑・付録（1922）』の併用から世帯主を出身県別にみると、最多は36名の滋賀県出身者で、29名の鳥取県出身者がそれに続き、両県出身者で過半数を占める。滋賀県出身者については12名が製材業に従事し、ガーディナーは７人である。それに対し、鳥取県出身者はほぼ半数の15名がガーディナーである。他県については、岡山・福島・鹿児島県出身者は各２名、和歌山・新潟・広島・福岡県では各１名がガーディナーとして活動していた。ガーディナーの総数は36名を数え、製材業の23名を上回っていた。つまり、キツラノ地区は、鳥取県出身者を中心とするガーディナーの集住区だったのである。

(3) 第3期は、戦後における日系ガーディナー組織の再編期にあたる。

1941年、太平洋戦争の開戦により、カナダではカナダ国籍を有する日系人までも敵性外国人とみなされるようになった。やがて日本人の強制移動が始まり、100マイル内陸での居住しか認められなかった。終戦により、1947年から少しずつＢＣ州への帰還が認められ、1949年には帰加２世のカナダへの再入国が許可された。しかしながら、ほとんどの不動産までも失っていた日本人（日系人）

にとって、日本人が就く職業は限られた。特に漁船だけでなく漁業ライセンスまで剥奪されたままでは、漁業に従事することは不可能であった。そのなかで、一部の製材業、そしてガーディナーに彼らは活路を求めた。日系ガーディナーは、戦前と同様に厳しいカナダ社会のなかで活躍を続けていた。

1959 年にＵＢＣにおける新渡戸稲造博士日本庭園の造園計画が起こった。1862 年(文久２)に岩手県に生まれ、後に農学者・教育者として近代日本の礎を築いた新渡戸は、1933 年（昭和８）にカナダ・バンフで開催された太平洋調査会会議に日本代表団団長として出席後、ビクトリアで客死した。「太平洋の架け橋」として活躍した彼を記念したＵＢＣの計画に対し、当時の日系社会も協力を惜しまなかった。３月には千葉大学造園科の森勘之助教授が招かれ、日本庭園の造園が開始された。そして、日本領事・田辺宗夫の懇請により、グレーター・バンクーバー日系市民協会（Japanese Canadian Citizens Association,：以下、ＪＣＣＡ）会長の石原Ｇ.暁から日系人の団体に造園費援助に関する日系団体代表者会の開催が呼びかけられた。10 月 24 日付の通知の発送先はバンクーバー市内の 12 団体、ならびにスティーブストンやニュー・ウェストンミンスターなどの５地域であった。ＪＣＣＡとバンクーバー日本語学校のほか、市内の団体の多くは宗教団体によって占められていた。そのなかにあって、筋子組合ともに日系の産業団体であった「ガーディナークラブ」にも通知が送られた。その代表者が、現在のバンクーバー日系ガーディナーズ協会初代会長・角知通である。

角は、1908 年（明治 41）10 月 20 日年に鳥取県に生まれた。1921 年に大阪市の製薬会社に就職すると同時に、夜間の工業学校に就学した角は、翌年には大丸百貨店へ転職した。やがて、1925 年 7 月にカナダへ渡航して製材業に就いた彼は、『加奈陀在留邦人々録(1926)』によればキツラノ地区の西２番街 1642 番に居住した。1928 年からガーディナーとして働き始めた彼は、庭園業だけでなく造園業を学ぶため、1930 年（昭和５）11 月から約 1 年半、一時帰国し、大阪府池田町（現在の池田市）で研鑽を重ねた。

戦時中のタシメやニューデンバーへの強制移動を経て、角は 1946 年にモントリオールで造園業を再開し、1955 年にバンクーバーへ戻っても継続した。そして、1959 年に協会の前身となる「日系ガーデン倶楽部」を設立し、その初代会長に迎えられた。新渡戸庭園の設計・造園を担った森教授から薫陶を受けた彼は、翌６月の同庭園の完成後は「筆頭庭師」、その後は「新渡戸庭園管理主任」として管理を任されたのである。このような同庭園の造園・管理、長年に渡る各地の日本庭園の造園、そして盆栽の普及活動に対して、1987 年５月 12 日に勲六等瑞宝章叙勲が日本政府から贈与された。グレーター・バンクーバー日系盆栽会の会長・名誉会長をはじめ、日本文化の啓蒙活動を続けていた角は、ガーディナーはもちろん、多くの人びとに惜しまれながら 1997 年８月にこの世を去った。88 年の彼の生涯については、日本庭園に関わるガーディナーとしてだけでなく盆栽の芸術家（Bonsai Artiest）としても捉えられねばならない。

(4) 第 4 期は、戦後移住者を迎え、庭園業だけでなく造園業へと発展した時期である。

戦前にカナダに生まれ、カナダ国籍を所持していた一・二世、あるいは戦時中に日本への帰国した後、戦後にカナダへ戻った日系人は帰加二世と呼ばれる。カナダ国籍を有する彼らに対し、1967 年にカナダ政府はカナダ国籍を持たない日本人の移住を認めた。このような人びとは、いわゆる新移民（新移住者）と呼ばれる。当初、自動車関係をはじめ、技術移民として移住が許可されることが多かったが、やがて就業先としてガーディナーを選択する新移民もいた。ここでも、特に英語が堪能でなく、造園技術を有さなくても庭園業に従事し、やがて独立していくという、戦前における日系ガーディナーの特徴が追従されている。当時、戦前から活躍していた一世のボスの多くは高齢を迎え、戦後にガーディナーを始めた二世、または帰加二世がボスとして活躍していた。なかでも、帰加二世として多数の和歌山県出身者のボスのもとで、ヘルパーになった新移民は少なくない。

1960 年代の日系ガ―ディナーは、トラック以外は特に機器を使用せず庭園業を営んでいた。日本・アメリカで農業研修を重ねてきた新移民のなかには、アメリカに普及していた機器を導入しはじめた。例えば、シアトルでローン・モア（Lawn Mower）やリール・モア(Reel Mower)など、雨天でも充分に性能を発揮する芝刈機がバンクーバーに持ちこまれた。さらに、1970 年代になると、トラックやバンなどの自動車とともに、これらを整備するによって、ガーディナーとして独立が比較的容易になった。それは、ガーディナーを生業に選択する新移民の増加を惹起した。このように、アメリカから庭園業の機器が導入された事実は、カナダ日本人史においても決して看過できないのである。

近年、日系ガーディナーのなかには、ワーキング・ホリデー制度でカナダに入国した者も少なくない。1986 年以降のこの制度の認可後、日系ガーディナーのボス・ヘルパーの雇用関係に、やや変化が生じるようになった。日系ガーディナーとしての基盤が築かれた戦前の第２期では地縁・血縁関係、戦後の第３期ではより広い一・二世と帰加二世との関係が中心であった。そして、第４期では帰加二世がボスとして独立を始め、新移民がヘルパーになった。やがて、バンクーバーの都市

開発とともにガーディナーの需要も増え、最新の機器を揃えた新移民の独立も多くなった。なかには、クレーンなどの重機も扱い、造園業への展開や、インド系やベトナム系移民をヘルパーとする者も現れた。それらに対し、ワーキング・ホリデー制度を利用した一定数の入国者が見込まれるため、彼らをヘルパーとして雇用するケースも多い。屋外での肉体労働という性格上、男性が多くなるものの、特定の技術を比較的必要としない庭園業が、この制度での就労先として選択されるのであろう。この制度を経て移住した日本人が、その経験を活かして、かつての自分自身と重ねるようにヘルパーを雇用している。つまり、いつの時代においてもガーディナーは、カナダでの就労の入口として日本人を暖かく迎えている。日本人が担う民族産業（Ethnic Business）として、ガーディナーが継承される可能性は決して小さくはないのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計９件）

①河原典史「カナダ日本人移民史研究における住所氏名録と火災保険図の歴史地理学的活用－ライフヒストリー研究への試的アプローチ－」、移民研究年報 20、17-37、2014、査読有

②河原典史「カナダ・ブリティッシュコロンビア州における火災保険図をめぐる基礎的研究」、（公益財団法人・国土地理協会助成担当編『学術研究助成報告集』、所収）95-111、2014、査読無

③河原典史「新渡戸庭園の造園とバンクーバー日系ガーディナーズ協会の創立－協会創立期の日系社会－」、55th.Anniverary,Vancouver Japanese Gardeners’Association,92-97,2014、査読無

④河原典史「カナダにおける日系ガーディナーの先駆者たち（6）－伝統を継いだ野田忠一－」The Year of 2014 Membership Roster、22-27、2014、査読無

⑤河原典史「カナダにおける日系ガーディナーの先駆者たち（5）－庭を掃くかな伯耆人－」The Year of 2013 Membership Roster、23-29、2013、査読無

⑥河原典史「カナダにおける日系ガーディナーの先駆者たち（４）－「花嫁の滝」を築いた古賀大吉－」The Year of 2012 Membership Roster、23-29、2012、査読無

⑦河原典史「ビクトリアの球戯とバンクーバーの達磨落とし－20 世紀初頭のカナダにおける日本庭園の模索－」、（マイグレーション研究会編『エスニシティを問いなおす－理論と変容－』、関西大学出版会、所収）249-265、2012、査読無

⑧河原典史「カナダにおける日系ガーディナーの先駆者たち（３）－農業技術者であった中村親子－」The Year of 2011 Membership Roster、22-29、2011、査読無

⑨河原典史「カナダにおける日系ガーディナーの先駆者たち（２）－豊福厚と桑野養盛園－」The Year of 2010 Membership Roster、21-27、2010、査読無

〔学会発表〕（計５件）

①河原典史「カナダへの移民」、JICA 横浜・海外移住資料館・日本移民学会共同開催公開講座「日本人と海外移住」、海外移住資料館、神奈川県横浜市、2014 年 10 月 25 日

②河原典史「カナダにおける日本庭園の保全と伝承－バンクーバー日系ガーディナーズ協会 55 周年を迎えて－」、バンクーバー日系ガーディナーズ協会 55 周年記念行事「ビクトリアにおける日本庭園をめぐるエクスカーション」、ローヤル・ロード大学、カナダ・ビクトリア市、2014 年 9 月 14～15 日

③河原典史「カナダへ渡ったみやきの人－「花嫁の滝」を造った古賀大吉－」、平成 2 年度みやき町歴史講座特別公開講座、こすもす館研修室、佐賀県みやき町、2013 年 6 月 15 日

④河原典史「カナダへ渡った鳥取県の人びと－ガーディナーとしての誇り－」、2012 年度日本移民学会ワークショップ、夢みなとタワー・シアタールーム、鳥取県境港市、2012 年 9 月 29 日

⑤河原典史「海を渡った高知の人々－カナダ日系ガーディナーの先駆者－」、人文地理学会第 270 回例会（特別例会）、高知市立自由民権記念館、高知県高知市、2010 年 6 月 5 日

６．研究組織

(1)研究代表者

河原典史（KAWAHARA Norifumi）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：60278489